

長屋天一坊（山本周五郎）

第一席 天一坊は大逆犯人のこと

並びに諸説巷間を賑わすこと

徳川八代將軍吉宗の時代に、天一坊事件という騒動があった。

真相のところは諸説まちまちで、ここに紹介すれば四五行で終る記事もあり、本書一冊分くらいのはうだいな実録もある。

またぜんぶ事実無根だという論もあつて、学界……などはべつに問題にもしなからうが、一般史家などは、……これもまあそのために眼色を変えるほどのことはないだろう。しかし演者としては「事実無根」と云われては困る。

それはこの際は断じて御免を蒙りたい。

天一坊は甲の記録では「改行」という名であるが、乙の文章では「宝沢」と呼ばれている。紀州の産であることは慥かしい。ともかくも將軍吉宗の直筆だという墨付と短刀を証拠にして、——自分は吉宗公の嫡出子である。こう名乗りをあげて、堂々と三葵の紋章をひけらかして、江戸へのりこんで来たということは、これはもうそれだけでたいした度胸である。かつて、敗戦の風雲に乗じて「おれが本家だ」といばりだした熊沢天皇様などは、そこはいくらか段が違ふと思ふ。

江戸中の評判は、うるさい程度以上であった。幕府としても相手が堂々と来たからには、そ知らぬ顔をしているわけには体面上としてもゆかなかった。とりいそぎ治安法官に実情調査を命じた。命を受けた担当者は誰であるかというところ……甲の記録では伊那半左衛門となっているが、乙の文章には越前守大岡忠相だとしてある。演者としてはどっちでもいいが、ひとつにはにんきなどの点も考慮して、ここには大岡忠相ということにしておきたい。

周知の如く越前守には、名判官という定評がある。指令を受けた彼はあらかじめ事件の全貌をぐつと睨み、小首を捻ったのち、得たり賢しと部下を八方に散らしたのである。

この探索の苦心には触れたくない。忠相としては肝胆を砕いたであろうし、部下たちは東奔西走、そこは草臥れたぐらゐのものではなかったらしい。が、詰るところ天一坊の悪事は摘発され、大岡越前としては法の威厳を示す必要上この坊主をば白洲の縁側から蹴落すのであるが、演劇ではここは大向うなるものが唸りだすそうである。

「あのここな、大逆犯人めが」

というようなことを忠相が断言する。これに対して天一坊はどうしたか。砂利の上へ蹴落された彼としては、そこはやはり自尊心というものもある関係から、いちおうふてくさったような姿勢をとるわけだろう。そして一種のせせら笑いをして、

「へっ、大岡様にやあ敵わねえ」

などと虚栄的な感想をもらす。要するにそれだけのことなのであつて、特別に唸り出すほどの問題ではないと思ふ。

天一坊ならびにその連累者たちは、極刑に処せられた。すなわち事件は決着したのであるが、甚だ奇怪にも、愚昧なる市民たちは納得しなかった。

天一坊が現われたときは、かれらはやみくもいきり立ったではないか。公方様にお家騒動を起こそうなんてずぶてえ野郎だ。おらっちの將軍家を乗っ取ろうとはいけつぷてえ畜生だ、石臼で粉にひいてあべ川にしまえ。

こういう種類の劣等なる評をしたではないか、にも拘らず一味が極刑に行われると、市民どもは前言を翻して、各自が急にひそひそ話を始めたのである。

「これあぐく、ないだがな、おらあこんどのお裁きは眉睡だと睨んでるんだ、あれにあおめえ裏の裏があるぜ」

「裏の裏たあなんの裏だ」

「大きな声じゃあ云えねえが、おう、ちよいと耳を貸しねえ、よし、これはぐく、ないだがな、あれあおめえ本物だあ」

「へええ——そうか、やつぱり本物かえ」

「そうだってことよ、あれあ慥かに將軍様の御落胤よ、ひとに饒舌つちやあいけねえぜ、ぐく、ないの話だからな、よし、こんなことがわかったらおめえ文句なしに、これだあ」

これらは無産階級の耳こすりであるが、有産知識階級においてはさすがにこれより穿っていた。

「実はさる信用のおける筋から聞いたのですがな、他言されでは困るんですが、これこれしかじか、……どうです、私もうすうすは推察していたんだが、実はこれこれしかじかと聞いては驚きました、……どうです」

「いやその話なんですがね、私もね、ほら御存知のあの方面

ね、あれからちよいと耳にしたことはしたんですがね、だがまさかと思ひましてね、だって貴方まさかねえ」

「いいえ、私のはごく信用のできる筋の話なんで、なにしろ將軍家におかれてはですな、そのときはらはらと御落涙、さすが親子の情であると、閣老一統も暗涙に咽ばれたというのですからな、いいえもう、これは間違いのない筋からの話なんでしてな」

情報の出どころの慥かな、しかし極秘ぐく、ないであるという、この種の風評が市中を横行した。せんさく好きな老人などは突拍子もないような書物など持ち出して来て、事件の淵源を考証したり解剖してみせたりするのである。

第二席 白が白たる道理のこと

並びに長屋の若者たくわんと

見代えられのこと

その当時、本所石原町に六軒長屋と呼ばれる貧民住宅区があった。

戸数は実は三十八軒ある。が、初めは六軒だったので、付近住民の怠慢と無関心によっていつまでも「六軒長屋」と呼ばれているわけらしい。家主は縄屋吾助、女房おたきとのあいだにわきという娘が一人いた。

吾助は下野の佐野という土地の産であって、故郷において二三の職業に失敗、三十一歳のおり江戸へ出て縄屋を開業した。以来約二十年、夫婦娘、三者一体となって業務に精励した結果六軒長屋を端のほうから一軒ずつ買ってゆき、自分は

表通りへ店を構え、なお長屋を順次——古材木を買い溜めては——増築に増築して、以て今日の大を成すに至ったものである。

長屋の住人たちは、かれらの家主に対して好意的ではなかった。かれらは蔭では吾助を「禿」と呼び、女房おたきを「ごうつく」と呼び、娘おわきをば「白」とも「色けち」とも呼んでいた。仇名としては没趣味な知恵のないものである。吾助は禿頭であつたし、おたきはごうつくそのものであつた。娘を白というのはもちろん彼女の腰部をさすので、これも実に俗なありふれた表現である。また色けちというのはこれはさらに俗な、些^{ちひ}かも曲のない或る意味を表わしていた。

おわきはもう二十六になる。一人娘だから婿を貰うわけだが、そして実際これまでに五人も婿を貰つたのであるが、五人とも半年そこそこでみな逃亡し、出奔し、三年このかたは独身でいる。——眼をくぼませて後家の男は逃げる、こういう卑劣なる川柳点があるというが、おわきは後家ではなかつたが、五人の婿はそれぞれどこかしらをくぼませ、命からがら逃げだしたと、長屋の住人共は伝えておる。

「おらあ知ってるんだ、おれと金太はな、すっかり知ってるんだ」

親の代から長屋で成長し、現在では共同して辻駕籠^{つじかご}を昇いでいる銀太と金太という二人の若者は、中んずく斯^か様に公言しておつた。

「あすこの婿は、五人ともおれたちの所へ、毎晩夜食を食ひに来たもんだ、なあ金太」

「うん、……来たもんだ」口の重い金太は考えながらゆつく

り頷く。

「やって来たもんだ、なにしろ、おれたちは夜中に帰って、それから夜食を喰^たべて、……寝るから、……そのときやって来たもんだつた、……五人ともだつた、そして五人とも泣いたもんだつた、いつもかつえてやがる、二番めの倉造つてえ婿なんぞは、毎晩おめえ^{どんぶり}で五杯も喰べやがつた、ぽろぽろ涙をこぼしながらよ、なあ金太」

「うん、……ぽろぽろとよ、涙をこぼし、また飯もこぼしたもんだ、……飯をこぼすと拾つて喰べ、……それくらいかつていたもんだ」

「なにしろおめえ、昼間は禿とごうつくが掛つてて働かせるだろう、なにしろ千住の先から西は品川目黒のはてまで車を曳いて駆けまわらなけりやあならねえ、それで餌はおめえ子供^この弁当くれえしきや食わせねえ、三度が三度おかずは梅干か味噌か古たくわんの尻尾で、魚なんぞは月に一遍、それも目刺し一尾だつてんだから、そしておめえ夜は夜であの白だ、なあ金太」

「うん、……あれは聞いていて、誰もがよもやと思う、本当の事とは誰もが考えられないもんだ、おれはまさかと思つた」
「三番めの幾次てえ婿だっけか、なにしろおめえ一と晩も欠かさず五度ずつ神輿^{みこし}のお渡りだてんだ、まるで搾木^{しめぎ}に掛けて種油をしぼるみてえに、うむを云わさねえてんだから、そしてちつとでも厭^{いと}なそぶりをすると、厭なら出ていきな、役にも立たねえ者にむだ飯を食わしとくわけにやあいかないんだから、こうぬかすんだからおどろきだ、なあ金太」

「うん、おどろきだ、まったく、……うん、そしてその婿の

持つて来た物はみんな取上げて、夫婦の小遣いは……、幾らだったか忘れたが、……それもあの白が取上げちまって、湯銭も呉れねえということだったもんだ」

「それで毎晩神輿だけはちゃんと渡るんだ、五番目の次郎助なんぞはおめえ、なにしろ毎晩おめえ六度か七度だってんだから、あいつは額までくぼませてやがった、なあ金太」

「うん、……あの次郎助はそんなふうだった、逃げるときはまた泣いた、……無事に逃げられればいいけれども、下手をして、もし捉まったときは、これこれのわけだからと、親許へ知らせて呉れと云って、うん、……ぼろぼろ泣いたもんだった」

演者としては「神輿」とか、「お渡り」などという俗語は知らない。また知りたくもないのであるが、大体として色けちなる仇名の意味は、これで解し得ると思う。

彼女は五尺そこその身長で、骨も太く肉付き遅しく、赭い縮れ髪で、腰部は白と云う以外に形容をなし難い。足は俗にがみ股といつて、外方に彎曲して短く太い。その上方に臀部が怒り出ておる。卑俗な言葉で云えば、出ツ尻であるが、同じ出ツ尻といつても大一番と称さなければなるまい。……彼女、つまりおわきは朝から晩までよく働く。虚栄心などは少しもない、服装とか身嗜みなどの無頓着さは、その無頓着さにおいて抜群である。

彼女の労働力は、その父親の三倍に匹敵するであろう。一面ごうつくの点にかけても、その母親を少しは凌駕していた。彼女は五番めの婿が逃亡して以来、それまで母親の役目であったところの、店賃の取立てを自分で執行した。

このことは、長屋の住人共にとっては、かなり被害であつたろう。母親、つまり「ごうつく」なるおたきはまだしもごうつく程度だったのである、が、彼女の取立ては甚大なるものであつた。

彼女は、大きなメリケン粉袋でもある布製の財布と帳面を持ち、矢立を帯に挟んで、多少前躰みになり、両手を――それは長くてぶら下げると膝のあたりまで届くが――だらりと左右に垂れて、かの出ツ尻を後方で振り立てつつ、泥溝板を鳴らし、或いは地面をずしんずしんと踏み鳴らして、路地から路地へと戸毎に訪問し、特に青年から壮年の男子、ときには少年でも老人でもいいが、ともあれ男子のいる家では、その家人はてきびしい取立てを蒙るわけであつた。

「おらんち、も道楽で長屋を貸してるんじゃねえからな、おめえんところは三月も溜まつてるじゃあねえか、え、……今日今夜、雨露風を凌がして貰って、店賃が払えねえじゃあ義理が済むめえ、よんど払えねえならうち、車の車あ三百で貸してやるから、今日にでも出ていって貰えてえ、おっと、出ていくに就いちゃあその火鉢と行李の中の物を頂いておくぜ」

文字で読むと、性別が不明のようであろう、聞いていても、男女の区別は明瞭とまではいかない。が、彼女が女性であることは、他の独身の男などの家へ取立てにゆくばあい判然するのである。

とりも直さず、そういう家へは彼女は夜になって訪問する。職業上からして帰宅のおそい者などは、おそい時刻に訪問するが、そうしたばあいの彼女の駆引きは、際立って精彩を放つのである。

「店賃ぐらいきちんと払ったらどうだい」

まずとりあえず右の如く第一声を浴びせるが、その眼はやさしく、声も色っぽい。そのうえ上半身や左右の手や腰部などで、種々なるところの挙動を示すが、これは柔軟体操ではなくしていわゆる「嬌態」であるらしい。

「そんながっちりした一人前の男がさ、おまえそれでも辜丸が有るのかえ、有るとすれば遊びにゆくんだろうが、むだじやねえかよ、ばからしい、どうでもゆきてえときにやおらにちよつとそう云うがいい、それで辜丸もおさまるし店賃もおさまるってmond、大家と店子は他人じゃあねえからな、はっはっは、今夜あたりどうだい、うすつ汚ねえけころをなんする銭で、もっと実のある楽しみをして店賃が払えるんだ、遠慮はねえんだがどうだい」

こうずけずけ判り切ったことを云われては、彼女の同情者の立場にある演者としては困る。が、長屋の独身男子たちは、演者よりも困ったらしい。

どんなに遊蕩心に燃えている男でも彼女の血走ってぎらぎら光る眼や、厚く捲れあがった赤い大きな濡れた唇や、妖気を発する程の逞しい躰軀や、そうして早くも火のように呼吸を荒くするさまを見るといかほど強烈に燃えている遊蕩心もかき消え、瞬時にして老僧の如く身内が冷えるという、かれらはおわきの好意を謝し、あわただしくも破れ財布をばはたいて、明朝の飯の代が無くとも、とりにそぎ店賃を払うのであった。

「おいよ、店賃は貰ったよ、貰ったからにやあただ帰っちゃ済むめえ、朝まであ時刻もたっぷりあるから、ひとつゆっく

りと」

「いや、そ、そいつあ待って、そいつだけは」

「遠慮はいらねえということよ、大家と店子は他人じゃあねえんだ、おら水臭えこたあ嫌えだから、ひとつざっくばらんに」

「まあ待って、ちょ、ちょいと待って呉んねえ、大家と店子は他人じゃあねえかもしれねえが、世間じゃあ大家は親、店子は子と云うくれえで、親子の仲でそんな事をすりやあ畜生だと云われるし、ま、とにかくそれに、今夜はおらあ草臥れて、このままぶっ倒れて眠りてえんだから、まあ今夜のところは、このとおり」

「ふん、だらしのねえ」彼女としては憤然とするものだろう、「草臥れた、眠りてえッて、どいつもこいつも、男てえ男がみんな同じことをほざきやあがる、据膳が食えねえような辜丸なら切って捨てちまうがいい、ああばかばかしい、帰ってたくわんでも洗って、ひと汗かいて寝るとしべえか、ちよつ」

演者としては、右のような卑劣なる言辞を紹介することを、江湖に対して恥じるものである。が、長屋の独身男子たちは、演者以上に恥じた。かれらは現にその当事者であって、面前において男性である自分とたくわんを比較されたのである。かれらがこの侮辱に対して、なにゆえに手を束ねていたかということは、出奔し去った五人の婿を前車の轍としたのみではない、が、ここではまず談話の本筋を進めることにする。

第三席 繩屋吾助一念発起のこと

並びに「系図書き師」も人の職たること

天一坊事件が江戸市民に及ぼした影響については、第一席で述べた。

繩屋吾助、いわゆる「禿」なる当人も、この事件から非常なる衝撃と示唆を受けたことは、これは人情のやむべからざるところであるだろう。彼は考えて溜息をつき、小首を捻って考え、溜息をついて、そうしてまた考えて、溜息をついてから独り言をもらした。

「世の中には、どこにどんな人間が、それとなく、いるかもしれない理屈だなあ……」それからまた考えて、独りで続けた、「洗ってみれば、おれにしたってどんな名門の血をひいているかもしれない、太田道灌の落胤の子孫とか、もっと偉い、それこそ室町公方様などというような人の、……そうだ、ここだ」

吾助は鼻をこすり、坐り直してさらに考えた。

「つまり、こういうときに系図というやつがものを云う理屈だて、系図、……という物がある、人間というものは両親があつて子を生む、その子が孫を生み孫が曾孫を生み、こうやって、きりもなく次から次と生んでいって、それで人間というものが今日ある理屈だ、……名物と云われる道具には伝来書があるし、書画掛物には箱書があるし、刀剣にも本阿弥の折紙がなければ筋はとおらない理屈だ、……すべてそれ相当の由緒書がある、それのないやつは筋もとおらないし偽物と

云われても返辞ができない理屈だ、まして人間、おれなども……、こうして旦那といわれるくらいの人格となってみれば、おまけにどんな名門高貴の血統であるかもしれないとなってみれば、……へえ先祖はわかりません、じゃあ世間に対して相済まない理屈だ、それはもはや人間の人格として、……いや、これはうかつだった、これはこんな独り言を云っているばあいじゃあないて」

繩屋吾助は、奔走し始めたわけである。彼は故郷の佐野へ数回も手紙を出し、その地の寺の住職に對し、やはり書簡を以て交渉し、住職の返信によって幾許かの金銭を送り、結果として数枚綴った過去帳の写しを受取った。……その写しに付けて、住職はなお寺の窮状を訴え、

——御送金だけの調査では別記の如くであるが、なお調査を進めれば、或いは貴殿の先祖はかの有名なる佐野源左衛門常世ということになるか計り知れぬ、それには調査料として金二十枚御送付ありたい。また金五十枚御送付あれば平将門公の御直裔なることが判明するかも愚考される。なおまたこれらに就いて系図が入用なるばあいは、系図書き師への染筆料として前者は金五枚、後者は金十五枚でお役に立つであらう。(注) 右の価格はごく格安に願ったものであることを、特に付記する次第。

こういう意味のことを書いて来た。吾助はさすが繩屋として大成するだけあつて、住職の狡猾なる意図をすぐさま見抜き、同時にその文言の中から「系図書き師」なる者の存在を知って、にこつと笑ったということは、さすが商才というべきであらう。系図書き。それは「藩翰譜」の正統くらいを持

って、諸家を回訪して、その家系を正し、補修し、そして最も多くのばあい各位の希望する系図を希望に応じて作製するを業とする者である。

かかる業者の存在は、家系の尊厳を冒瀆すると怒る勿れ、演者の遠い知人に天智天皇このかた一代の欠もなく連綿百二十代にわたるところの完全なる系図を所有する者もあり、彼はその有難さに日常身の置くところを知らず、病んで危篤となるや、^{しやうはん}這般の系図を拝しつゝ極めてうやうやしく死んでいったという。……是れを以て是れをみるに、いかなる職業も世を益し人を便ぜざるはない、と断言して憚らざるものだらう。

吾助がどこで系図書き人をみつけたかは、史実には遺つておらぬ。

六十あまりの、しなだれたような老人、赤錆びたような白髪あかこひげの、そして同色の顎髭あごひげを伸ばした、常時みずばなを垂らしている老人を伴れて来て、自分の家に泊めて、そうして遂には自家の正統なところの系図を書き上げさせたのであった。「こいだへ、こい、こいだへきゃ」

報酬を手にしたときは、その系図書き人なる老人は、すっかり齒の脱落した口をぱくぱくさせたものである。

「こいでは、その、はいめのふエいやくに、もといやへんか、あま、あまいふとを、ばはにふうと、……その、わいだとて」「やかましいね、この乞食爺い」娘おわきが、このように応待した、「四日も五日も泊り込んで三度三度の飯をくらって、わけのわからぬ妙なお題目を書きやあがつて、おまけに錢をせしめてなんの文句がけつかるんだ、さっさと出ていかねえ

と眼のくり玉へ焼け火箸ひばしをぶつ通すぜ」「ふわやもやもやふわ、はばいやもや」
こう返答をして、老人はよたよたとどこかへ逃げ去ったのである。

第四席 吾助系図妄想のとりことなること

並びに長屋一同大迷惑のこと

さもあらばあれ、繩屋吾助は、今や系図の持主となった。それは謡曲の「鉢の木」で周知なる佐野源左衛門常世を祖とし、十一代吾助に及ぶ綿密なる列伝で、但し仔細に検討すれば、随所に御落胤あり夫婦養子あり廃嫡あり失踪者ありという結構で宗祖なる常世とはぜんぜん血縁関係のないことを証明しておるのである。

が、元来系図なるものは、それが在るだけでもう役目は足りるのであつてもしそんな詮索せんさくをするとなれば、万世一系と信ぜられるところの皇室におかせられ奉つても、越前のどこかに皇孫あり、これを迎えて継体天皇とす、などという押付け仕事のような記録があるではないか。で、それでつづめたところ、吾助は系図の所有者となつたわけである。

却かえつて説。吾助は自家の由緒正しき系図を繰り返し眺め、また眺めするうちに、繩屋吾助である自分が、ちよつと洗つてみれば佐野源左衛門常世の後裔である、という事実の嚴肅さに、心からおどろきの溜息をもらすようになったのであった。「これで見ると、やっぱり、世の中にはどんな人間がそれとなく、いるかもしれない理屈だなあ」

されば、と、これは心の中で考えたことであるが、自分の持ち長屋に住む連中のなかにも、叩いてみれば相当の埃^{ほこり}の出る者もいるかもしれない。まさか冗談でなく、將軍家とまではゆかずとも、どこかの大名の御落胤^{ごらくいん}くらいは出て来るかも知からない。

「これは充分に疑ぐつてみなければならぬ、現にこの俺がいい証拠^{しやうこ}じゃあないか、とすれば、誰にもそこは断言できない理屈だ」

そしてもしも、と、これも心の中で考えたのであるが、もしもそういう人格がいたとして、それが俺の持ち長屋から発見されたとなればどうなるか。

そのときは現に在るところの系図^{けいず}がものを云うではないか、佐野源左衛門の後裔^{こうい}が歴として繩屋吾助である、とすればどんなに絶大なことになるか。

「これはうかつにしてはいられない、こんな独り言など云っているばあいではない」

こう独り言を云って、吾助は早速長屋住人の身許調査にとりかかったのである。

長屋住人にとっては、このことは一つの新しい被害であった。吾助大家はごめんよと入って来る。そうしてまず天一坊事件に就いての注意を喚起し、家には系図、名物道具には伝来書、書画骨董^{こつどう}には箱書、刀剣には折紙なるものの存在を説き、さて自分のゆゆしきところの系図をそこへ拡げて見せ、鄭重^{ていじゆう}にこれを袱紗^{ふくさ}に包み、さて威容を正して質問する。

「儂^わもこうして相当以上の家柄^{けいへ}だことをうちあげたからしては、まあ、しぜん言葉なども改めるという理屈だが、それに

就いてはおまえさんの家柄^{けいへ}というものを聞きたい」

「へえ、それはどうも、なんですが、どうもわっちらときては、それはもうその、なんです」

「いや隠すことはなくて、儂もこうして系図を見せたわけで、それというのが大家と店子は親と子といったような理屈で、だからしてはおまえさんもうちあげて貰いたい」

「へえ、それやあもうよくわかるんですが、なにしろわっちの家柄^{けいへ}だの芋穀^{いもぐ}なんてええ、いいものはでえ嫌えなんで」

「家柄^{けいへ}がえ、いいわけはない、家柄^{けいへ}というものは、……それは聞くのだけれども、おまえさんの祖先はどういうことになっているか」

「さあてね、祖先となると、こいつは大家さんの前ですが、実はここんところばかに仕事に追われてるんで、暫くつきあいが絶えているようなくあいですから」

「それはいけない、いくら仕事忙しいからといって、祖先とつきあわないなどということでは、人間の義理が欠ける理屈だ、……では聞くのだけれども、系図のほうはどうなってるんだ」

「冗談いっちゃいけない、いくら大家さんだってふざけちゃいけない、わっちはこれでも左官^{しゃかん}としちゃ腕っきと云われてるんだ、酒のために貧乏こそしっちゃあいるが、そんなかがわしいうしろ暗えまねは、これっぽっちもした覚えはねえんだ、あんまりばかにしたことを云わねえでお呉んなさい」

「なにをそんなに怒るんだ、儂はただ系図のことを聞いたばかりじゃないか」

「まだ云ってやがる、いってえおれがいつけえ、買いをした

ってんだ、もういっぺんぬかしてみろ、大家だろうが紺屋だろうが向う脛すねをかつ払って……」

これは威勢のいい男であり、店賃をきちんと払っている関係からして、右の如く簡単に片づいたのであるが、他の多くのばあいはこうはいかない。

「自分の家柄血統がわからないという筈はない、刀剣書画などでさえそれぞれ身分証明の由緒書がある、それが人間たるものがわからないという道理はない、え、そういう理屈だろう」

「まことにどうも面目しだいもございませんので、どうぞ私のところはひとつお目こぼしを」

「お目こぼしといつてなにも儂は博奕ばくちやかっぱらいの詮議せんぎをしているわけじゃあない、儂がこれだけの家柄であつてみれば、店子のおまえさん方の中にもそれ相当の人格がいるかもしれぬ、こないだの天一坊様の例もあることだ、もしそれ相当の御落胤おとしとか、よもやというような家柄血統の御仁がいたら」

「いえもうそのへんのところは、決して御心配はいりませんので、決してもう家柄血統などというだいそれたものは」

「べつにだいそれるとか、それないとか、これはそんなわざとらしい話ではない、おまえさんの先祖はどういう身分の人か、公卿くけいとか武家とか大名とか、それがおちぶれてどうしたとか、二代目はこれこれ三代目はしかじか、なに兵衛の子がかに衛門を生んで、それ吉がかれ蔵の子だという、つまりおまえさんまでの代々の、つまり系図、と云つてわからなければ番付、とはちよつと違つて、が、しかし、……え、そんな

物はない、なんにも、まるつきりか」

「ええそのへんはもうきれいさっぱりなんで、どうかひとつお目こぼしのほどを、店賃のほうはすぐお払い申しますんで、どうかここはひとつ」

「呆あきれたもんだ、呆れてものも云えない」吾助としては、輕侮けいぶに耐えないわけだろう、「書画骨董でさえ、箱書とか由緒があるという時勢に、おまえさんそれで人間かえ」

訪問調査の進行につれて、吾助の落胆は日に増大した。御落胤らしき者はおろか、多少これとは首を捻ひねるような者さえいない。否、大多数の店子が、家柄や血筋、先祖とか系図とかいうことにまったく関心がない。

——なんという無知通俗なやつらであるか。

吾助は、つい憤激せざるを得なくなつた。おまえさんそれでも人間かえ、こう云つていたのが、やがてはそんなことではもの足りなくなり、

「おまえたちは書画にも刀剣にも劣つた、人間の皮をかぶつた薪きざつぽだ」

などといふ心にあるようなことを口走るようになった。最も晦く渋じゆうを極めたのは、かの銀太金太の二人の若者のばあいである。前述の如く、両名はこの長屋で出生してこの長屋で育成し、幼年期、青年期と通して、親密に月日を送つた。

片方が両親を亡くせば、片方もまた二親を亡くすというくらい、いわゆる水魚の交わりであつて、現在では長屋の一戸に共同で住み、共同で駕か舁いき業を営んでおる。で、両名としては、繩屋吾助が此處へ移住して来るまえからの住人であり、繩屋一家が食うや食わずの生活から、今日に到るまでの経緯

を観察しているので、

——あの成り上りの縄^{くす}っ屑。

斯様にてんから軽視していた。自然吾助が調査訪問に来て、源左衛門常世以来の系図を展開し、祖先血統の質問に及んだときは、終始兩人の臍^{へそ}が茶を沸かしたということである。

「ええありません、そんな奇^き天^{てん}烈^{れつ}なまやかしものは、あつしやあでえ嫌えでね、憚りながらこれでも辻駕を担いでまっとうに食ってるんだから、そんなもんがあみてえな物にやあ用はありやせんツさ」

「そんな愚かな、その、これはももんがあとかまやかしものとか、そんなその、……では聞くのだが、おまえの親父はなに者だ」

「親父ってちやんのことかい、ああ、ちやんは銀造ってつてね、この金太のちやんは金兵衛というんで、どっちもいい人間だったよ、金太のちやんはでこ金、おれのちやんはやぶ銀ッて云われてたつけ、それッてえのがおれのちやんは斜^{やぶ}視^{にらみ}だったし金兵衛さんは、なあ金太」

「うん、……おいらのちやんは、かなりおでこだった、うん、かなりなもんだった」

「いや、儂は親父の人相を聞いているのではないで、親父があるとするれば、親父の親父があるわけだろう、つまりおまえたちにとつては祖父という理屈のものだ」

「ああそんな化物もいたようだ」

「化物というやつがあるか、仮にも血を分けた祖父と孫、祖父は大親というくらいで、いかに無学文盲とは云いながら、……では聞くのだけれども、その祖父は名をなんといい

生れはどこだ」

「おらあ手品使いじゃあねえから、じじいの人別^{にんべつ}までは知らねえ」

「なにが手品だ、どういう理屈で手品を使うんだ、ばかばかしい、云うことが一々……では聞くのだけれども、おまえたちの家は元来からの町人か、それともずっと先は武家とか公卿とか、或いはこの諸大名とかいう……」

「うるせえなこの禿は、おらそんないかがわしいけどものたあ、ひっかかりはねえ、つまらねえいんねんをつけると承知しねえぞ」

「なにを云うんだ、禿とはなんだ」吾助としてはむかついたわけである、「いかがわしいのはおまえのほうだ、儂も佐野源左衛門の末孫となつてみれば、そこは家名のこともあるから忍耐するのだけれども、なんだおまえは、先祖も知らず家柄も血筋もわからない、それでも人間かえ、こ、な、なんだ、暴力を振う気か、こ、こ、そんな物を持ちやがって、この、……ひっ」

吾助は表へとび出し、なにか一言ぴんとした言を云ってやろうとしたらしい、が、銀太が息杖^{いきづえ}を持つて出て来るようすであつてみれば、ぴんとした言は断念したわけだろう、とりあえず泥溝^{どろぞう}板^{いた}を踏み鳴らして逃げていった。

「こいつあなんとかしなくちゃあいけねえ、なんとかあの憑^つき物のおちるくふうをしなくっちゃあ、長屋一統の迷惑だぜ」

銀太は息杖を置きながら右の如く感慨をもらし、ここに長屋同志の対策会議を開催するという、決意をするに到つたのである。

第五席 長屋一同雨宿會議のこと

並びに金太銀太名案のこと

或る雨の日の午後のことであつたが、長屋同志の重立つた者が十人、売^{ばい}卜^{ぼく}者の尾崎不識齋なる者の宅に集合した。そこには幾許かの酒肴^{しゅごう}も出たものだろう、同志たる立場上かれらは景氣をつけて、大家の非を鳴らした。

「あの禿の野郎、おれに向つてけえず、買いがどうだとかこうだとか、とんでもねえことをぬかしやあがつた」

同志の一人なる左官職は、こう呻^{うめ}いた。

「私はね、私はそれは店賃は溜めました」

一人は、早くもほろ酔いになつて云つた。

「恥を話さなければ理がとおらない、だから云いますけれどもね、店賃は溜めています、けれどもそれだからといって、書画にも劣るの、人間ではないとまで云われては、……皆さんの前ですが、私は、こんな、く……」

「それは尤^{もつと}も、源兵衛さんの泣く気持は尤も、わしもそれを云われた、わしは佃煮^{つくだ煮}行商、けれども人でなしと佃煮とは無関係」

「とにかくくてんでんが、愚痴を並べていてもしょうがねえ」銀太が先住民の貫禄^{かんろく}をみせてこう云つた、「いったいどうして禿にあんな憑き物がしたか、病氣の根はなにか、どうしたらあの氣違え沙汰を治すことができるか、こいつをまず相談しようじゃあねえか」

「お、お、お、へヒーへヒー」

奇声をあげたのは、吃^{ども}りの勘次である、彼は鋸^{のこぎり}の目立てを業とする、そして独身者の一人なのだが、本格的な吃りであつて、いつか「明日はたぶん雨だろう」ということを、すっかり云うために二時間かかり、またそのために精力を使い果してひきつけたことがある。

「まあ勘次はそこで、坐つていて呉ればいいや、おめえが饒舌^{じょうぜつ}つて源兵衛さんに泣かれていちゃあ寄合が流れちまう、……不識先生、なにかこれに就いて卦^けは立たねえかい」

「さればさ、さればこの件だが」不識先生は、顎髭^{あごひげ}をしごいて云つた、「儂^{わが}がみたところ、家主吾助に憑いておるのは天一坊であるな」

「ええつ、天一坊ですかい」

「かの仁が家柄血統を調べるときの言動、仔細に考うるに天一坊じゃ、天は上にあり地は下にある、人間はその中間にあつて、火風水木金土がこれを、……あれじゃ、そのなにしておる、じゃによつて天一坊とてその自然の律動循環の理は動かせぬ、じゃが、あれは実は將軍家正統の御落胤であつたという流説^{りゅうせつ}で」

「そんな子^{しのたま}曰^いわくを云つたつてわからねえ、もっとわかるように絵解きをしてやつて呉んねえ」

「さればさ、そこで家主吾助としてはじゃ、仮にもこの長屋にじゃな、天一坊めいた人間がいるかどうか、いるとすれば天地人、これはもうなんじゃ、吾助として繩屋どころの騒動ではない、かの山内伊賀之亮、赤川大膳、常樂院……などはいけない、かれらは獄門になつた、じゃが獄門にならぬほうの山内や大膳になれるか知れぬ、そこじゃて、……常樂院で

もいい、家主吾助としては莫大^{ばくたい}な出世であるし、かのこうつく並びに臼^{うす}においても」

「そいつだ、まちげえなし」銀太がまるっこい膝頭を叩いた、

「禿^{かぶ}のよまいごととぴったり合う、そいつですよ先生」

列席の同志はみな頷き、声々に不識齋先生の卦を肯定した。

そこで銀太は早速のところ、対策の討議に移ることを提案し、どうしたら天一坊の憑き物をおとすことができるかに就いて、腹藏なき意見を挑発したのである。各位は首を捻り、腕組みをし、貧乏ゆすりをし、俄^{いつ}かに咳^{せき}をし鼻をかみしめて、それぞれ腹藏なく妙案を開陳したが、やがて口の重い金太が、

「うん、……そのことで考^{かん}げえたもんだったが」そう重々しく云って銀太を見た、「あのう、それ、あれよ、……神田の柳原の土堤^{どて}に、うす馬鹿の乞食がいたもんだろう」

「青瓢^{あおびょうたん}筆^{ふで}みてえなあ^あの若造か」

「うん、あいつだ、……あいつでやれねえかと、いま考^{かん}げえ

たんだったんだが」

「だっておめえ、あのうす馬鹿をどうするんだ」

「うん、それなんだが、あれをだな、なんとかくふうして、

天一坊みてえに仕立ててだ、そうして大家に押っ付けたらどうか」

「あのうす馬鹿の乞食をか」

「あのうす馬鹿の乞食をよ」金太は右足の拇指を静かに動かした、「あいつによ、うん、お墨付とか、短刀とか、まあそういった、……こいつはありきたりの物で、なんとかうまくまじなつてよ、こんな物を持ったこんな人間がいたんだが、こ

う云って大家に押っ付けられ

「うまい、その件は絶妙じゃ、それじゃ」

不識齋先生が、思わず前へ乗出したので、着物の膝が——地が脆^{もろ}くなつていたのだろうか——びりびりと大きく裂けて口をあいた。

「それを実行すべしじゃ、家主吾助はひっかかる、些^{ちやうど}かも疑惑なしじゃ、短刀はそこらのがらくた道具で買えばよろし、お墨付は儂^{おろ}が書く、古い鳥子紙^{とりこがみ}かなにかへ、三文判でも捺^{おさ}せば歴としたものになるて、それじゃ、それで家主吾助も満悦し、我ら一統もこの難を免れる、それそれ、それを決議すべしじゃ」

ここに対策会議は、一決したわけであつた。

第六席 尊きお墨付と短刀のこと

並びに御落胤危うくお漏らしのこと

この雨の日より僅か数日して、そこには蔭ながら不埒^{ふちやち}な工作をしたものだろうが、或る風の強い夕刻じぶん、銀太と金太が一人の茫漠として泰然たる青年を、駕に乘せて六軒長屋へ伴つて来た。

かねて妥協してあることだからして近隣の住人たちはがやがやと集合し、がやがやと山になって覗^{のぞ}きに来た。

これがかの、神田柳原堤の、うす馬鹿なる乞食だというものであろう。年は十九かそこそこ二十歳、銭湯へも入れ、髪結床へもいったらしい、当然、住人の共同出資と思われるが、へばったような着物に袴^{はかま}をはいて、扇子を持っておった。

顔だちは、これは比較的なはなしであるけれども、美醜に

大別するとすれば、その中間ぐらいには査定できるものだろう。鼻が太く長いところ、眼尻が下って、ゆるみを帯びた唇でいつもにたにたそれとなく笑っているところなどは、もし識見のある人が見るとすれば、無欲恬淡くんとたんにして非凡な相がないとは断言しないと思う。

騒ぎを聞きつけて、家主吾助がやって来たことは云うまでもない。銀太はそこは多少の思慮があるので、

「大家さんは来ねえで下さい、これはあつしと金太で片づけますから、なんか知らねえ身分のある人らしいし、妙な書付だの短刀なんか持つてるんで、おまけに大名の若殿みてえに馬鹿なんで、とにかく大家さんに迷惑が掛るといけねえから」

「いやそんなことはない、店子のことで迷惑が掛るのは家主の義理だて、なにか、その、書付とか短刀など持っているって、それは本当のことか」

「すばらしく大事な物らしいんで、けどこいつはあつしと金太の責任だから」

「そうでない、いやそうでない」吾助はいきごみ、まず、そこに集まっている住人を追い払った、「さあさあみんな帰った帰った、おまえたちがいたってしょうがない、みんな帰って晩飯の支度でもするがいい、この戸は閉めるから」

吾助はがたぴしと雨戸を閉め、上へあがってむんずと坐った。実に興味津々しんしんたる心境らしい、相好を崩して銀太に向い、

「その、なんだ、その書付と短刀というのをひとつ、まず儂が鑑定しようじゃないか」

「あつしは構わねえけれども、なんしろえてえの知れねえ一件だからな、なあ金太」

「うん、……あとで文句をくうと」

「いや決して」吾助はお稻荷様ぐらいに誓ってもいいらしいかった、「決してそんなことはないで、理屈からいってもこういう事案は家主が引受けるべき理屈だ、決して文句などは云わないから、とにかくその二た品を見せて呉れ」

「じゃあ、……見せるか、金太」

「うん、まあ、しょうがねえだろうが」

銀太がしぶしぶ出したのは、古ぼけた油紙の包である。吾助が昂奮きうふんに震える手でそれをあけると、中には古ぼけて汚れたような唐草の風呂敷包があった、それを解くとやっぱり古ぼけた唐棧縞の風呂敷包が現われ、それを開くと、又々古ぼけた浅黄木綿の風呂敷包が出現した。

「これはなかなか」吾助はそつと呟つぶやいた、「どうしてなかなか、雑なことではこう本式にはいかぬものだ、この包み方だけでも……」

そして遂に、その中から金欄きんらんの袋に入った短刀と、洪紙めいたずぬけて大きい封に入れた、古めかしい書付が出て来た。

「このこの、この、いや、こ、こ」

吾助は、がたがたと震えだした。

その金欄の袋というのが、実はぼろ市で買った古物の袈裟けさの切っ端で、源兵衛のかみさんが苦心して——と云うのが糸を強く緊めるとそこから裂けるほど脆もろけていたので——袋に縫ったものだと気がつかなかったものである。

吾助は恭敬の身ぶりで押頂いたのち、書付を取出して披見した。それには篋棒けうぼうに凝った筆法で、いかめしく左のような文章が記述してあったのである。

記証文の事

其許に契り候こと実証なり。可愛き可愛き其許を思えば、一日既に千秋。千里なお一里。粉骨碎身也。男子出生のみぎりにあるなれば、余が末孫に紛れなく候。後日のため垢付きの家宝の短刀ひとふり、証拠のために遣わし候。右実証に候也。

佳年祥月吉日よしちか印

かめ殿

「これは本筋だ、本筋どころではないて」

吾助は克己心と呼び起こし、極力このところ沈着になろうと努めつつ、こんどは袋の中から、これまた謹厳に一礼して、短刀を出して見た。これも古ほうけた品だった。

第一に寸法が規格外れである。製作者が脇差にしようか短刀にしようかと迷ったあげく、どっちにする決心もつかず、さりとて途中で止めるわけにもいかなかったため、まあともかくもということ、そらを使って仕上げたといったものに相違ない。

柄は、これは鮫皮のようでもあるしまた巻いたもののようでもあるし、格別なんでもないようでもある。目貫や柄頭は、もちろん存在する。しかも金などという俗な金具は使用してはない。薄い赤銅の延板を使って、どちらにも無雑作に井桁に橘の紋が、敲き出して浮かしになっている。

鞘はという、……鞘は剥げちよろけで、塗料のところは黒であったか鼠色であったか確言は出来ぬ。まあ見たところ、

なんとも云えない風雅な、ちよつと奥床しい色合いというものだろう。これにも井桁に橘の紋が、それだけは判然と、胡粉のようなもので捺染してあった。

「どこかで見たような紋だが」吾助は考え深げに小首を捻った、「なにかどこかで、井桁に、だんぶく、ああそうだ法華の寺にある紋だが」

こんな独り言を云いながら、敬虔に短刀を抜いてみた。恐らくあげ物というやつだろう、鰐から切尖までのバランスがとれていない。また研ぎがよほど乱暴——それは大道の古道具屋で買ったときまったくの赤鰯だったので、肉の減るほど研がなければならなかったわけだが——だったとみえ、にえも匂いもみだれも殆んど消滅し、まるで「相済みません」と詫びを入れているような刀相をしていた。

「ますます本格正統だ、これは古刀も古刀、よほど昔の、うむ、鎌倉期のものか、或いはもつと古いか知れないて」吾助は縄屋の眼力でこう睨んだものだろう、「いや恐れ入った、何百年となく研ぎに研いで研ぎあげ、幾戦場を往来した古つわものに違いない、かかる伝統ゆかしき品は拝見するが初めて、いや恐れ入った、正しく本筋でございましょうて」

吾助は禿から汗を吹き出させ、お短刀を鞘におさめると、坐り直して若者を見、それから銀太金太の説明を求めた。

「そこで聞くのだけれども、いったいこのお方を、どうしておまえたちが」

「それなんですよ」銀太が待兼ねていたように、「今日あつしと金太で客を浜町まで送っていったんで、こう降っちゃあやりきれねえ、稼ぎより軀のこつたと、帰るつもりで河岸つぷ

ちをやつて来ますとね、両国橋のまん中にこの人が立つてるんで」

「橋のまん中、……両国橋の」

「側に橋番の爺がいましたよ、聞いてみると橋銭が無いのに、平気でずんずん、悠々と渡つてゆくつてんで」

「悠々と、へええ、生れが違うんだな」

「もう平氣の平左でね、まるつきり大名の若殿みてえなんだそうでね、あっしと金太も見るとこの通りの御人品、こいつあお氣の毒だ、なにか深いわけのあるお方だろうと思つたもんだから、ともかくもてんで橋銭を立替えましてね、聞くてえとまるつきり世間知らず、てんで下情てえものに通じていらつしやらねえんで、……なんだ金太、おめえ笑つてるばあいいじゃあねえだろう」

「む、むせ、咽せちゃつたんだよ、うん、咽せてね、なにしろ、お氣の毒なもんだから」

「そういうわけであま金太とも相談したところ、よしんばどんな深いわけがあるにしろ、こんな御身分の高いらしい方を、……おめえまた咽せるのか金太、……であま御身分の高い方をうろろうおさせ申しとくのは恐れ多い、なにはともあれ家へお供をしてということだね、それで実はお伴れ申したというわけなんです」

「それはそれは、稼業に似合わず、よくそんなところへ氣がついた、それでと」吾助はここで初めてその若者のほうへ向き直つた、「そこでひとつ、僕はこの長屋の家主で吾助という者ですが、……お初におめにかかります」

「ああそうだろう、一文呉れるか」

「ちよちよ、えへん」

銀太はすばやく若者の尻をつねつた。

「どうもね大家さん、このお方はときどき妙な冗談を仰しやるんで」

「いやおまえは黙つていなさい、総じて高貴のお生れの方は、お言葉が雅びているからして、おまえたちにはその意がげせぬものだ、黙つていなさい、……ええ恐れながら私めは、唯今こそ零落して繩屋渡世などいたしておりますが、祖先はかの佐野の庄の住人、源左衛門常世にございましてな」

「ああそうだろう、源左は馬鹿で間が抜けてるからな、いつも芥溜ばかり引掻き廻して、痛ッ」

「これはどうも、仰せのほどまことに、へっへ……、で、なんでござりますかな、その御出生の地などはいずれの方面でござりまするかな」

「ああそうだろう、よき、よきよき、よきに取り扱え」

「へへっ恐れ入り奉りまする、次に御生母様はまだ御在世なりや、これまでいずれに御在住ありしや、そのへんのところお漏らし下さりようなれば」

「漏らさなくちやいけないのかい」

「ぜひひとつお漏らしのほどを、へい」

「あたいはね、漏らしたくないけどね」

「ちよちよ、ちよっと待った」銀太は吃驚して叫んだ、「てめえ、いいえ、おまえさん前を捲つたりしてどうするんだ」

「この人がね、ここで漏らせて云うから」

「へっへ……、いやこれはどうも」吾助は愛想よく笑つたらう、

「見る銀太、な、お育ちは争えない、御冗談にもしろ疊の

上へ悠々とお漏らしなさろうという、この一事だけでも貴いお血筋だということは、儂などにはもう、そこはこの眼識だて

第七席 金太銀太大笑いのこと

並びに曰「ぐやくいん」の鼻に惚れること

「へええ面白えもんですな、なあ金太、いまのをおめえ聞いたか」

「うん、聞いたよ」金太は重い口である、「うん、それで、それで、そして思ったんだが、あの夜泣きうどんの爺さんなんぞは、寝たつきりで漏らしてるが、あれはよつぽどの生れかなあ」

「馬鹿野郎、あれは中氣だ」吾助としては、憐愍れんぴんに耐えないわけであつた、「中氣の垂れ流しと、上つ方の悠々たるお漏らしと一緒にするやつがあるか、それだから無学文盲と嗤わらわれるんだ、……そこで云うのだけれども、かかる高貴のお方をこんなむさ苦しい処へお置き申すわけにはいかない、儂が引取ってお預かり申すから」

「そいつはいけねえ、それやあ困るよ」

「なぜいけない、なにが不服だ」

「だってこんな素性も知れねえ者を、いいえそれやあ御人品もこの通りだし、いやいや、いやしやかやいや、ええ畜生、そのい、や、し、からねえお生れのようにやあ見えるが、もしまやかし者だとすれば、大家さんに迷惑が掛るし」

「いいえさ、店子の迷惑は、大家の心配するのが当然だよ、

そこが大家と店子の」

「まあお聞きなせえ、まやかし者で大家さんが迷惑を引取つて呉れるなあいいけれども、これがもしだね」銀太は一つ咳をする、「もしこれが本物だったとして、この短刀や証文が本物で、このお方がどつかの大名の若殿で、もしまあ出世をなさるとすればですよ、そんなときあつしたちやあまる損てことに、……ねえ、へへへへ大家さんの口真似じゃあねえが、そういう理屈じゃありませんか」

「それを云うな、すぐそういう品のないことを云うから、駕昇かじやうきなどと蔑あさままれるんだ」

吾助はそう云いながら財布を出し、その中から幾許いくばくかの小粒銀を取つてそこへ置いた。

「一応のところこれは骨折り賃だ、こういう事は欲得ではないて、このお方が世に出たときは、それはまたお屋敷からそれ相当の、しかしそんな卑しい考えを持つようでは、到底この、出世は出来ないものだ、そういうことにして、ではこのお方は儂の家へお伴れ申すから」

取引を済ませて、吾助はかの証拠品を恭うやうやしく包み直し、かの若者を案内して、己れの住居へと去つていった。

銀太金太の両名が、どの範囲で笑つたか。これに就いては、演者わたくしは語ることをやめる。この卑劣なるふざけ方には人道の上から云つて組したくはない。かれらは笑いに笑つた。金太はそれ程でもなかったが、銀太はやがて脾腹ひばらが痛くなり、それでも笑いが停止しないために、畳を掻き掻むしったり、竹行李に抱きついたりした。

「ひーひーひー、助けて呉れ」

「う、それもそうだが」

金太は口も重いがまた思慮にも重々しいところがあった。

「大丈夫かな、あのうす馬鹿、いずれはぼろを出すだろうが、すぐ泥を吐くようなことはあるめえか」

「そこだけは大丈夫で、心配はねえ」

ようやく発作がおさまって、銀太は涙を拭きながらこう云った。

「おれがよくよくあいつに云い聞かした、どこかの凄^{すこ}いような家の御落胤だと思ひ込^こましといたからな、そういうところは馬鹿の人徳てえもんで、一度こうと思つたら待つたなしよ、世間でも馬鹿の一つ覚えというくれえだ、大丈夫だよ」

「うん、それはまあ、そうだ」

「それより大家の禿め、おつ、みろみろ、豆板が三枚、三分あるぜ、これやあ驚きだ」

「うんなにしろ本筋の本格だからな」

「悠々たるお漏らしか、ひーひーひー、ああまただ、ひーひーひー、助けて呉れ、ひーひー、ものう云わねえで呉れ、ひーひー」

そうしてやがて、兩名の者は、この吉報を伝えるべく、長屋同志の家を歴訪にでかけたのであった。

ここにおいて、繩屋一家はどうかというと、こうつくと曰は初めせせら笑い良人であり父であるところの吾助が、ままと専門的詐欺にかかったのだと断定した。

この自分の名さえ知らない若者は、高貴の生れであるために温雅沈着なのではなく、むしろ間抜けでありうす馬鹿であるに過ぎないと判定した。

これに対して当のうす馬鹿であり、神田柳原堤の乞食であつたところの、この若者は、眼尻をだらりと下げ、機嫌よくにたにた笑いながら頷いた。

「ああそうだよ、みんなねえ、そう云うよ、あたいのことをね、うす馬鹿だって、みんなそう云うけどねえ、あたいはそんねえ、うす馬鹿じゃありやしない、これでもねえ、あたいは、ごや、……ごやく、ごやくいんだつてよ、もの凄^{すこ}いような、本当だよ、ごやく、ごや、ごやくいんだかやねえ、よきに取り扱え」

「それみろ、聞いたかいまのお言葉を」吾助は莊重な眼つきをした、「御落胤を、ごやく、いんと仰しやる、この下情に通じていらつしやらぬところが、おまえたちにはわからねえのは情けない、実に涙がこぼれる、御自分からうす馬鹿ではないと仰しやる御胸中、あッあ、おいたわしいと、おまえたちが思わないということは、女はさてさて浅墓なものなるかな」

「浅はねえ、ああ、浅はあたひ知つてるよ」若者はにたにた笑い、貧乏ゆすりをする、「あいつはうす馬鹿だぜ、本当だよ、あいつねえ、あたひの貰いをねえ、取っちゃうんだ、けれどもあたひは、いまに、いまに、……あたひはいまに、おだ、おだいもくになるんだつてよ、そ云つたよ、本当だよ、本当にあの人がそ云つたぜ」

「おだいもくと仰しやるのはお大名ということだ、いいか」吾助は震えだした、「御自分の口から、この儂を御信賴あればこそ、秘中の秘をお漏らし、いや、いやお漏らしではない、お漏らしは後架でして頂く」

「ばかばかしい気でも違つたのかい」

「ごうつくは厚い唇を反らせ、鼻の孔を上へ向けた。

「御信仰だかなんだか知らないが、どうせ拾って来るなら繩の切っ端でも拾って来るがいい、繩はおまんまを食わないからね、ふん、家へ置くなら食い扶持は、おまえさんの煙草錢から差引だよ」

「でもこの人の鼻、立派だわねえ」

白であり色けちであるところのおわきは、真正面からこのお方の顔を眺め、特にその偉大なるところの逞しき鼻に、惹きつけられたものだろう。舌舐めずりをしながら妙な眼をした。

「鼻の大きい男は、なにかも大きいって云うじゃないの、それに、馬鹿のなんとかって、……いいわ阿母さん、この人の食い扶持はあたしが払うことにするわ」

ふしぎなことであるが、おわきは家庭に於ては女性的言語を弄するものだろう。これを聞いて母親ごうつくは酸いような顔をしたが、父親なる禿は俄かに膝を乗出したのである。

「そそ、それは儂の実はかねて思うところだ、それは頼む、そこところは万難を排してひとつ、……まかり間違えばお部屋さま、とすれば儂とおたきは御幼君の、……なんに当るか、それは若君が御出産の上だけれども」

「親と娘で揃って気が違えば世話あない、あたしゃ知らないよ、そんなこと」ごうつくはますます鼻の孔を上へ向けた、「断わっとくけどもね、あたしゃまっぴらだからね、いいかい、あたしゃ関係がないんだから」

「いいわよ、いいことよ阿母さん」

おわきはおわきでますます女めかすのであった。

「この人のことで阿母さんに迷惑は掛けなくてよ、……ねえおまえさん、さあ、あたしと一緒にいらっしやいな、あたしのお部屋へいきましよう、ねえ、一緒にあっちへいきましようよ」

「うへっ、鼻がでかいからどこかもって、いい気なものさ、そんなになにがなんなら天狗様でも婿に取ればいい」

ごうつくは、このように嘶くのであった。

閑話休題。吾助は多忙になった。彼は早速のところ奔走して、数年間に発刊されたる「武鑑」を買い集め、「井桁に橘」の紋と「よしちか」なる名とを捜し始めた。

周知の如く武鑑とは現代の紳士録の先駆的出版物であつて、徳川一門から譜代外様の大名諸侯残らずその家の紋どころ、槍飾り馬標、領地江戸邸、各家の家族関係から重臣まで記載してある。そうしてその間には増刊的に、氏姓系譜とか官職名簿といったものも開板した。

吾助はこれらを手当り次第にめぐり返し、首を捻っては壁や天床を眺め、ときには店の客とも応接し、またしては丹念にめぐり返しするのであった。

「人間の一心何事か成らざるべけんや、草の根を刈り石を除けるの故事ありという」こう独語を漏らすこともあった、「五風十雨、七転び八起き、艱難汝を……汝を……」

そして或る夜、吾助は片手に武鑑の一冊を持ち、坐ったままで三尺程度は跳上って、あ、あ、こ、こ、こ、という風な声を発した。

彼は遂に発見したのである。井桁に橘の紋を。それは摂津国十二万四千石の領主、松平伊賀守の紋どころ——替紋では

あったが——であり然もその分家の式部なる人の字が吉近と云い、然も五年前に本家へ入って伊賀守を相続しているのである。

吾助はまず勝手へいって水を飲み、それから戦術を立てるがために、改めて坐り直した。

第八席 嘘から出た真のこと

並びに御落胤「臼」に大搾られのこと

仰天したのを、銀太と金太の両名に限定するわけにはいかない。長屋同志の面々も仰天した、寧ろ長屋全体が仰天したと云つても、演者としては無責任ではないと思う。都合上つづめて云えば、繩屋吾助は羽折袴で松平伊賀邸に参上し、隠密を旨として其の筋へ伺いを立てた。然るところ驚くべし、伊賀守吉近は式部といつて分家に在る頃、側近の侍女の二三を愛した事実があつた。

それだけなら驚くには当たらない、その二三のうちの一人に猛烈なる嫉妬心と頑強なる飲酒癖をもった者がおり、時にしば泥酔して嫉妬のために狂い立ち、主君であり旦那であるところの吉近をば、——この出来損いの唐茄子野郎などと呼び、当の旦那の顔を引掻きちらし、器物を破壊する底の狼藉なる振舞いに及んだ。吉近侯のみならず、係り家来の立場としては、迷惑だったものだろう、が、迷惑にも拘らず吉近侯は彼女を溺愛し、顔中を引掻き傷にされながらも、敢えて屈せず、

——彼女なくてなんの己れが桜哉。

などと脂下った感想を漏らされたとある。やがて彼女は懐妊し、そのため嫉妬と飲酒悪癖は増大に増大、或る夜、吉近侯と未曾有の大格闘を実行したあげく、

——あ、口惜しいこの助平野郎、おらあもう生きちゃあいねえ、大川へ身を投げて死んで呉れる、おっ死んで九代崇つて呉れるぞ、いまにほえづらをかくなこの……野郎。

この……なる言語は伝わっておらぬが、彼女はそのまま邸を脱走し、踪跡をくらましたのである。吉近侯にあつては切実なる未練に捉われ、手を尽して搜索されたが行衛のところは皆目不明、本家伊賀守を相続された今日においてなお、

——彼女は今頃はどこにどうしていられるやら、生れた子は男か女か、ああ世は果敢なきありさまよな。

右の如く常々長々長大息を漏らされありということであつた。すなわち、係り家来としては書付も短刀も精密検査に及ばず、ただ「御落胤出現」なる一事を以て俄然いろいろめき立ったものだろう。但しかかる事件は家督問題に重なるところの関連がある、そこは取扱い上つねに深甚なる謀略を要するので、係り家来は吾助に向い、

「御身分に就いては、厳に秘密を守るべし、追つて手順を考案し、正当なる方式を以て御当家へお迎え申すべければ、最も鄭重尊崇の念を忘れず、暫時があいだ其の方に於てお預かり申し奉るべし、決して御不自由ないし御不快を相掛けざるよう、屹度申付け候もの也」

こう厳命を下し、なお且つ金十枚を下げ渡されたという実情である。吾助の驚喜に就いては、これも演者として講演は不必要だと思ふ。

ごうつくはな可疑を解かなかったが、金十枚に對しては信頼してもいいらしかった。白は、彼女個人はどうであつたかという、……これは誇張すると思われては困るわけだが、その当日から髪を武家風に結い、武家風の着物に武家風の帯を締め、武家風化粧をし言語動作もそれらしく振舞うに到つた。実例を挙げるならば、店賃を取りに行くばあい、彼女の帯には矢立のほか懐剣が差してあるのである。そうして店子に向つては、上方から見下す必要上、背丈が低いために、やむなく半身を後方へ反らせ、眼の玉のみ下方へ向けて、而うした饅まんじゅうえたような声で云うのである。

「これこれ紙屑屋宇平、店賃をありていに出しましょうぞ、早うこれへ、早う早う」

または路地内で住人にゆき会うばあい、彼女は大抵の人間が吃驚するほど反り返る、信じられない程度まで反つて、そうして寛容に微笑しながら、頭部でこくりと頷うなづいて云う。

「おお、にちにち大儀じゃのう」

長屋住人たちとしては、狂気の沙汰と誤解した。色けちの「色」なるものが、頭を冒したと思つたもので、幾らかは痛快がったとしても、これは暗愚な俗人共のことであるから、やむを得ないと思う。

が、或る日、吾助から長屋代表の寄合を求められ、過般の厳秘なところの実態を打明けられたとき初めてかれらは仰天したわけである。

吾助が長屋代表に寄合を求め、かかる重大秘密を自ら曝露ばくろした所以ゆゑんのものはなんであるかという……、彼は左の如き要求を發したのであつた。

「そこで云うのだけれども、そういう尊い御身分の方であられる以上、なにはともあれ御殿を建ててお住い頂かねば相成らぬ、ましてすでに娘おわきにお手が付いたる今日、いやこれは私事であるが、……で、それに就いて、六軒長屋のうち三十二軒のところ取払いそこを御用地として御殿新築の計画を進めておるわけあいだからして、……これは云うまでもなく尊貴なる方よりの御内命と心得て貰わねばならないが、だからして無理な通告はしないもので、期限を六十日と切るわけである、六十日」

吾助は、さすがに威厳のある目つきで、ぐるつと長屋代表の顔を眺めまわした。

「今日より六十日の期限に、該当地上の長屋を取払う件、固く契約されます可く、依よ而て、そういうわけだから、ひとつ、これだけは儂としてはつきり云つて置く」

長屋住人の全部が、いかに仰天したか、これですべてが分明であると思う。が、銀太と金太の兩名の者は、仰天だけでは済まなかつた。

「だってあいつはうす馬鹿で、柳原堤の乞食なんだから、現に乞食をしていたやつをおれたちが引張つて来たんだから、なあ金太」

「うん、……慥たかに、柳原堤じゃあ、乞食の、うす馬鹿だったものだ」

「それが十二万四千石松平伊賀様の御落胤だつて、そんな饒棒べんぼうなすつ頓狂な、ううう、そのへちやむくれた話があるもんか、べてんにひつ掛つたにちげえねえ、それだけは憚はばりながらこの銀太が証人だ、いまにざまあ見やがれた、なあ金太」

「うん、……いまにきつと、そんなこつたろう、そうでねえにしたって、まあ、そんなこつたろう」

然し次の月になると、吾助はまた羽折袴で伊賀守邸へ出頭し、御手当として金三十枚を下げ渡されて来た。御親子対面までは、月々金三十枚ずつ扶持されるというのである。……吾助は此の度も長屋代表を呼び集め、その旨を告げて、六十日期限の取払いを確認させた。事ここに及んでは、最早、銀太としても蔭口をきく勇氣はなかった。また長屋の住人共は今両名を多少は恨んだ、中には浮薄な人間もあつたろう、二人に会うと妙な笑い方をして、

「銀太さん金太さん、いい者をみつけて来て呉れたね、お蔭でおれたちも結構なことになった、有難うよ」

などという嬉しがらせめいたことを云うのである。両名の者は大く、さりと云いたい。

「世の中は逆さまだつてえことを云うが、こんなばかな事があるだろうか」銀太はべそをかいて云つた、「本物の天一坊は偽物で、偽物の天一坊が本物だつてよ、……なんだかいやアなところもちになつて来た、ことによるとおいらなんぞも洗つてみれやあ五十万石かなんぞの諸大名の御落胤かもしれねえ、そうじゃねえか金太」

「うん、……その心配はある、それは氣をつけなくちゃいけねえ、かもしれねえ」

「こいつあとんだ事になった、おらあ寝そびれて風邪をひっこみそうだ」

だがそれにしても、この期間中かのうす馬鹿なる御落胤は、どうしていたか。彼もまた、蓋をあけたところは、べそをか

いていた。彼はあれ以来はずっと繩屋の一室に檻禁され、昼夜いずれの時と限らず、白であり色けちであるところの、娘おわきの訪問を受付けなければならぬ。

その点うす馬鹿は無限的能力を持つと俗人は云うのであるが、それは単に世におもねるの説であつて、組織学上から検討してみても、五官五能の満足ならざる人躰が、その一件にのみ絶大なる精力を持つという学理は成立しないのである。

演者としては、ごまかしはきかない。現に、御落胤は痩せているのではないか、曾て出奔し去つた五人の媚の如く、……すでにかなり痩せて、眼光はとろんとなり、唇は垂れ蒼ざめて、常に虚脱的なべそをかい、漠然と天床や壁を見たり、どこかをぼりぼり引掻いたりしてゐる。

「あたいは、お貰いをしてえるほうがよかつた、柳原の土堤は、あたいを、こんなに、押っぺさなかつた、土堤にいたときは、こんなに草臥れなかつた、ごやくいんなんて、あたいは、まっぴやだ」

こんな独り言を云うときもある。もしかかるときおわきが側にいると、彼女は色を作して喚きたてる。言葉は勿論、ごく上品であつて、ときに語彙の狂いはあるが、然し武家の風格を崩さないことは云うまでもない。

「さような御意は、聞く耳もありましようぞえ、若殿様には御健勝にましませば、柳原の土堤などという御上意は誰しも存ぜぬこと、壁に耳ある世の習いとて、おひひひひひ、御安楽に思し召されませられいなあ」

おひひひというのは笑い声であるがそのときは、彼女は必ずなんらかの行動に出る。その行動に就いては講演はできな

いけれども、御落胤はとかく異な声をあげ、時にじたばたすることなどある点だけは、触れて置いてもよいと思う。

「あのねえ、あの、あのね、あたいは、ううふふふ、くちユぐるのやアだよ、あつ、うっ、あのあの、……たアんま」どたばたと音がするわけだろう、「あたいたアんま、あつ、ねえったや、おばちゃんッ、もうごめ、もうごめんだよ」

「これはしたり若殿様、そのようにおうろたえ遊ばすと、姫ごぜのあられもないと世上の物やらいになりやすぞえこれまあちよつと、お静かに、あれ、え、この脳天気め、じたばたするとうぬ、こうするぞ、抜け作野郎」

「ごめんだよ、ごめんだよう、きゅッ」

さて演者は、講演を急ぐことにしようと思う。

第九席 嘘はやはり嘘のこと

並びに事件落着大喜利のこと

事件発祥より第三月めに入ったとき、吾助の督促は、漸次に現実性を露呈して来た。御殿新築のための用材は、今や長屋脇の空地に山を作り、指定地域の長屋住人に対しては、連日の如く期限切迫の警告を鳴らし、仮にも延期の許さる可からざる旨を反復厳達した。

「もういけねえ、俺あ引越しの支度にかかるよ、此処も長え馴染だったがなあ」

「お互えになあ」

こんな会話を聞きたびに、銀太金太は身の縮む思いだったろう。諦めのいい家庭の二三は既にそれぞれ他へ住居を契約

して、長屋からして泣く泣く移転したくらいである。が、ところがである。……それは或る晴天の、初夏の風爽やかなるところの、日の、午後二時頃のことであったが、三人の供を従えた一人の立派やかなる武士が、縄屋吾助の家へやって来てからに、そこでかなりな悶着が始まったのである。

「自分は松平伊賀守家の者であるが、縄屋吾助と申すは其の方であるか」

その武士は、まずこう発言した。年の頃は三十四五歳であるか、眉の太い眼の鋭い、きっぱりとした顔だちで、姿勢のところも凛としていたと云いたい。吾助は店先に這いつくばり、えへら笑い、揉み手、頻繁なる低頭など、各種の挙動をしたことはしたものだろう。そこへ娘おわきが出て来て、「これはこれはようこそ」とそこへ坐つて手を突いた、「御家臣様には態々のお運び、ようこそこれへ、いらせられましようぞえ」

武士は、瞬間的にはあるけれども、恟つとしたのらしい。赭い縮れ毛の髪の毛、武家風な服装をした、肉付きも骨も四肢もずんぐりと太く逞しい、白粉と紅の化けたような、総体異形なこの女性を、彼は初めは妖怪かなにかと誤解したのか知れない。

ありていに云えば武士はたじたと半歩ほど後ろへ身を引いた。が、そこはさすが修練のある者だったろう、ぐっと踏止まってさも怪訝そうに吾助を見た。

「へへっ、これなるは娘おわき」こう吾助は申上げた、「即ち佐野源左衛門家の正統なる一女にて若殿、いや御落胤様のお側近くお仕え奉り、そこは親の口よりは言上しがたい処まで、

と申しまするところは」

「おひひひひ」おわきは嬌^{きやうしゅう}羞の笑いと共に父の言葉を確証した、「恥^{とど}ずかしながら疾^とより、わらわはお手付の身にござりましょうわいなあ」

かかるあいだに既に多くの長屋住人たちが、表のあちらこちらに立って、恐怖と好奇の眼を輝かしながら、この有様をば観望しておった。

「其の方が繩屋吾助であるな」武士はこう念を押した、「間違はなく吾助だと申すのだな」

「そこはもう決して間違いはござりません」

「左様なれば申し聞けるが、先頃より其の方、伊賀守様上屋敷にまかり出で、御落胤云々の虚構を申し立てたる許^{ばか}りか、大枚なる金子を騙^{へん}取^{しゅ}せりというが確^{しか}と相違ないか」

「これは異なることを仰せられます、御落胤様の儀は御邸お役人も既にお認めに相成り、金子なるものは、これはお世話申すためのお手当てと致しまして前後三回にわたり七十両、あなた様より御下賜に相成つたものにござります」

「黙れ黙れ、御落胤などというろんな者がある道理はないぞ」

「それはおめがね違い」おわきが脇から云った、「現にお書付とお短刀の証拠もあり、現に御落胤様には唯今おひひひひ、よくお疲れ遊ばして、おひひひひお寝間でおより遊ばされましようぞえなあ」

「その者をこれへ出せ、問答には及ばぬ、その曲^{くせ}者をこれへ出せ」

おわきは、つんとしたものだろ。この野郎腰を抜かすな、

などと思った容子で、立って奥へはいって、そうして御落胤を伴れて出て来た。御落胤はすっかり眼をくぼませ、ふらふらと、骨の抜けたような歩き方で出て来て、くにやくにやとそこへ坐つたのである。

「これがその曲者だな」武士はこう云って、御落胤の全貌を眺め、ぐっと凄^{しみ}いような声で訊問^{しもん}を始めた、「これ、其の方はなに者で、名はなんと申すか」

「――へ、へ、へ……」

「若殿様には早う、早う御上意遊ばされましようぞえなあ」

「黙れ女、控えおろうぞ」武士は大喝^{だいかく}した、「これ返答をしろ、其の方はなに者であるか」

「あ、あた、あた、ごやくいん……」

「はつきりと申せ、なに者で名はなんというか、紛らわしきことを申すと、おのれ、容赦^{ようしや}はせぬぞ」

「あたあたあた、あたあた」御落胤はまっ蒼になり、震え上って手を合わせた、「あ、あたいは、なんにも知やないんだよ、ごめんだよ、たたた、たんまだよ、や、や、やなやな」

「口も満足にきけぬのか、この馬鹿者」

「そだそだ、そ、みんなねエ、そう云うんだよ、馬鹿め、うす馬鹿めつてよ、ほんとだよ、柳原じゃみんな、知ってゆよ、あたのお貰いをしてたかやね、嘘つかないよ」

「なんと、……なんと」武士は眼を瞠^みった、「其の方は柳原で乞食をしていたと申すのか」

「乞食じゃないよ、おも、おも、お貰いだよ」

「その辺まことに御艱難^{かいなん}、まことにお痛わしき」

「黙れ吾助、控えおらぬか、これ馬鹿者、それでは其の方、

柳原に於て乞食をしておった、しかと左様であるか」

「乞食やないって云うのにさ」うす馬鹿としては、侮辱に耐えられないのらしい、「乞食はね、源公だの房州だの太市のことだ、ほんとだよ、あたいはお貰いなんだかや、ほんとだよ、みんな知ってゆよ、阿母さんは土堤のおかなくてさ、そいつだって乞食じゃなかったんだかやね、やっぱいお貰いでしかやね、ほんとでしかや、みんな知ってゆんだかや、あたいは土堤のうす馬鹿でしかやね」

「生得の愚か者とみえる」武士が苦い顔をしたことは云うまでもない、「では其の方なぜ此の家へ来ておる、なぜ柳原でお貰いをしておらんのだ」

うす馬鹿は、べそをかいた。それから涙を、ぼろぼろと豆をこぼすようにこぼした。

「帰やして呉んないの、この人が、あたいたい柳原のほうがいいんだけど、土堤はねあたいを押っぺさないし、土堤は舐めたり撥ったりもしないし、そえかや、いろんな事もしないでしかや、ほんとでしよ、だかや、あたあた、あたいたい柳原へ帰りたいの」

「今すぐ帰りたいか」

「帰いたい」うす馬鹿は片手で涙を拭きながら、軀を揺さぶった、「帰いたい、柳原へ帰いたい、すぐ帰きたいのよ、うえーん、うえーん」

「よし帰れ、許すからすぐに帰ってゆけ」

「えっ、かか、えっ、……ほんと帰っていいの、ほんと帰って、嘘つかない」

「ちよちよちよっとお待ちを願います」

「吾助には構わぬ、早く帰れ」

武士がそう云ったとき、うす馬鹿は既にそこから姿を掻消していた。既にそのときは店の前は、長屋住人たちが人垣を作っていたのであるが、うす馬鹿は店からとび出して、その人垣を抜けて脱走した筈であるけれども、誰一人としてそれを確認することができなかった——ということとは、うす馬鹿としていかに命が惜しかったかということの証拠だと思う。

「あな、貴方様はどうしてこんな、こ、こんななされ方は、た、唯では相済みませんぞ、わた、私にはお書付もあり、お短刀もありますぞ、私はただちに御邸へ」

「おお、邸へまいれ」武士は多少は憐愍の尻目で見やった、「殿には御分家に在す折、若氣のお過ちにて侍女をお愛し遊ばされた、しかしその侍女は先日お産み申した和子様と共に、殿へお目通りの上、唯今はお中屋敷におられる、第一に、お愛し遊ばされたは九年以前であるぞ、あの乞食は二十歳にはなるであろう、三十一歳の殿に、二十歳の御落胤があつてよいと思うか……」

「はあ、……そ、……はあ……」

「自分が見るところ、其の方にも悪意はないようじゃ、欲に眼の昏んだ愚か者の所為とみて遣わす、本来ならば奉行所へ達し、屹度申し付く可きところなれど、此の度は穩便にして取らせるから有難く心得ろ」

「はあ……、はあ……」

「但し金子七十両は十日を限り、其の方自身にて御邸へ持参するよう、十日期限七十両、万一にも相違あるときは、始終の事ただちに奉行所へ達するであろう、申し付けたぞ」

「あのもし、ちよいとお待ち下さい」おわきは、狼^{ろうばい}狼^{ろうばい}的にこ
う呼び止めた、「貴方はそれでいいでしょうけど、それでお役
目は済んだでしょうけど、あたしはいつたいていどうしてお呉れ
なさいですか」

「——どうするとは、なんの事だ」

「あたしは唯のからだじゃありません、貴方だから云います
んですけど、あたしのお腹にはもう御落胤様の御落胤が入って
るんです、この片をつけずにいつちまうなんて、それじゃお
侍様の責任は持てないじゃありませんか、帰るならあたしの
このお腹のきまりをつけていってお呉れなさいませ」

「よしよいい事を教えてやる」武士は寛容に冷笑して云っ
た、「その腹の始末がしたかったら雑作ない、いいか、今すぐ
にな、柳原へゆけ」

そうして供をば従えて、武士は悠々と去っていったのであ
る。それと同時に人垣を作っていた長屋住人共はどつと関^{とぎ}の
声をあげ、足を以て地面を踏鳴らし、

「腹の始末は柳原へゆきやれ」

などと下劣なる罵^{ののし}罵^{ののし}を喚きたてるのであった。それと同時
に、いやそれより先に、店の中ではこうつくが出て来て色け
ちは色けちで、左右から良人^{おとこ}であり父であるところの吾助に搦^お
みかかって、揉みくちやにしながら叫んでいた。

「この禿頭のろくでなしのすつとこどつこいの兵六玉め」と
これはこうつく、「今日までのあの馬鹿の食い扶持を返せ、う
ぬのような底抜けのど阿呆のおつちよこちよいにや、あいそ
がつきた、出てゆけえ」

「なにが御落胤だよう、こん畜生」と、これは色けち、「あん

な乞食のうす馬鹿を押し付けやがって、ええ口惜しい、こう、
こう、こう、この頓間のへちやむくれの人でなしめ、おれの
腹をどうする気だ、こん畜生、なにが佐野の正統家だ、偽の
系図なんぞ書かしやがって、ええ畜生、なにがお書付のお短
刀だ、さあ野郎、こうなれやあ、唯あ置かねえからそう思え」
「長屋の皆さん、ひー」これは吾助、「ひー、どうかお助けを、
ひー、あ、どうぞ皆さん、お助け、お助けを、ひー、人殺し」
講演を終るに当って、演者^{わたし}としては事の結末はつけたい。
この騒ぎを聞いて、銀太と金太は逸早く行方を昏^{くら}ました、
縄屋一家に就いてはおわきは卒直に云えば六人めの婿に逃げ
られたし、吾助としては御殿新築のために買込んだ用材の代
金や、伊賀守邸へ金七十両返却のため、やむなく長屋もろと
も自分の店と居宅を売却し、或る夜、闇に紛れて、親子三人
いずれかへ逃亡したものである。

長屋天一坊なる一大事件の終結は以上の如くであって、特
にこれ以上、演者としてはなにも付加えたくないと思う。さ
らば。